

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「コタキナバル・リエゾンオフィス邦人向け講演会」

日時：2017年1月7日（土）15：00～17：00

場所：コタキナバル日本人学校

参加者：33名（講演者含む）

内容

AA 研コタキナバル・リエゾンオフィス (KKLO) とコタキナバル日本人会の共催により、日本人会会員向けの講演会を開催した。冒頭、KKLO 拠点長の床呂郁哉所員から挨拶と趣旨説明があった。本講演会は KKLO のアウトリーチ活動の一端として KKLO に関する研究者の研究活動の成果の一端を一般の方々に公开发信することを目的としており、昨年度に続いて今回が四回目である。また同拠点長より、今回もコタキナバル日本人会の全面的なご協力によって開催が可能となったことへ謝意が述べられた。続いて、金子奈央氏による講演が行われた。講演の後には質疑応答が行われ、日本の教育との違いや政府のマレー人優遇政策との関連、サバにおける外国人への教育など、多くの質問が出された。講演の要旨は以下の通り。

【要旨】

「教育からみるマルチ○○社会マレーシア」

金子 奈央（日本貿易振興会・アジア経済研究所／AA 研共同研究員）

マレーシアは、マレー人、華人、インド人という 3 つの主要な民族と、その他の先住諸民族から構成される多民族社会である。言語、習慣、宗教など様々な点で異なる多様な民族で社会が構成されており、独立から約 60 年近く（マレーシア結成からは 53 年）経った現在に至るまで、「多様性の尊重」や、「国民統合の達成」といった問題は、「多様な多様性」を内包するマレーシアにとって重要な課題であり続けている。特に国民教育制度は、これらの課題に取り組むための重要な手段とみなされてきた。従って、「社会的特徴である多○○性を国としてどう取り扱うか」に対するマレーシアという国のスタンスは、その時々々の教育政策に強く反映されている。本報告は、社会の特徴が強く反映されている国民教育制度の歴史の変遷および現状について概観することを通して、マレーシアの「多様な多様性」について考察することを目的としている。

更に本報告では、北ボルネオ（現サバ州、以下サバ）に着目し、同地の教育制度および政策の歴史的展開を整理し、マレーシアの国民教育史におけるボルネオの位置づけについて概観することで、サバ州の教育の「独自性」についても考察してみたい。マレーシアの国

民教育は、政治的マジョリティであるマレー人の意向を強く反映し、マレー語を重視した「マレー的」国民教育制度であると評価されることが多い。従って、マレー人の民族語であるマレー語を中心に据え発展し、マレー人が主導権を握る連邦政府によって中央集権が最も徹底されたものとして、国民教育は捉えられる傾向が強い。一方で過去に遡れば、1963年にマレーシア結成に伴いイギリスから独立する際、サバは教育分野における広い自主権を獲得していたという歴史的経験を持っている。半島部において、社会が歴史的に内包してきた教育の多元的性質が、マレー語を中心とした中央集権的な教育制度の下に統合、整備されるプロセスが強調される1960年代において、半島部とは異なる社会文化的特徴（マジョリティはマレー人ではなく先住諸民族で、クリスチャンも多い）および被植民地支配経験をもっているサバにおいて、これまで独自に持っていた教育制度を維持することが認められていたということになる。これは、多元的な教育制度の存在を国民教育の枠組みの中に連邦政府自らが認めたことを意味し、サバの教育の歴史的展開と照らし合わせてマレーシアの国民教育を再考察すると、最も多元性が認められていた時代と捉えることが可能である。